

雑事記(45)

盛丘 由樹年

戦争遺跡探訪(16)

今回は次の4項目の探訪記をまとめた。

①騎兵旅団兵舎跡(千葉県船橋市) 2022/11/5

習志野騎連隊の兵舎の一つが残っていた。この木造建築物は、東邦大学の武道館として近年まで使われていたが、老朽化により取り壊しが決まった。惜しむ声もあり、東邦大学のご厚意により、解体前に日時限定で一般公開が行われた。これはニュースとして新聞の記事にもなったから、私の目に留まった。私も行ってみよう。

11月5日(土) 日暮里駅と京成津田沼駅を経由して京成大久保駅に降りた。この日は公開の最終日に当たった。

地図を広げると、今でもこの北方に、自衛隊習志野駐屯地や習志野演習場がある。習志野というと、軍隊を連想する人がいるだろう。

ところで、この辺は習志野の呼び名の方がふさわしいけれど、行政区としては船橋市に属する。



秋山好古大将の記念碑

駅から北へ歩いて東邦大学の正門を目指した。その途中で、道端の一角に竹垣に囲われたところがあった。

中に秋山好古よしかる（1859～1930）の記念碑があり、馬の頭部をかたどったオブジェの中に、写真付きで、名前が掲げられていた。「習志野騎兵旅団長 秋山好古大将」台座には「天地無私」と、揮毫が刻字されている。この人は秋山兄弟の兄であり、司馬遼太郎（1908～1986）の小説「坂の上の雲」で、主要な登場人物の一人だ。

古代より馬は戦闘に使われていたけれど、日本では昭和になっても軍隊で兵站物資を運ぶためなどに、馬を使っていた。（激戦地では食用にもなったとされる）東邦大学は駅から10分ほどだった。構内に旧陸軍の兵舎があることは、ここが軍用地だったわけで、旧陸軍習志野騎兵連隊が駐屯していた。

東邦大学は1945年（昭和20）に東京都大森地区にあった校舎などが空襲で焼失したため、1946年にこの地に移転し、習志野キャンパスとして開校した。

構内に入ると、テント張りの案内所があり、来場者を受け付けていた。意外に、見学者が列をなすほど多いことに驚いた。私は、解体寸前の古い木造建屋を見に来るような「物好き」は少ないだろうと思っていた。



兵舎の外観

それは、ビルの隙間に隠れるように建っていた。倉庫のような建屋で、外壁は横板を並べたものだ。裏の方を回ってみると、その横板の一部が朽ちて破損していた。これでは、取り壊されるのはやむを得ない。この近くの一角に連隊にちなんだ記念碑がいくつかあつたりして、私は納得しながら周りを歩いた。



兵舎の内部

入口が開いており、内に入れる。内部の床は武道場にふさわしい板張りだ。天井板がなく、梁がむき出しだ。

歴史を感じさせる。ここで兵隊たち、そして学生たちが剣道などの練習に励んでいたわけだ。

その後、私は鎌ヶ谷大仏に向かった。

この小旅行の準備段階で、周辺地図を見ていた時、新京成電鉄線上の一つの駅名が「鎌ヶ谷大仏駅」となっていることに気づいた。駅名に大仏があるぐらいだから、この近くに大仏があるのだろうと確信した。大きな遠回りにはならないので、帰りに寄ってみることにしていた。

鎌ヶ谷大仏駅に着くと、ついでに、駅のそばの八幡神社に寄った。由緒ある神社らしいが、境内がやや荒れている。境内の中の社の一つは、東日本大震災で崩壊したままの状態になっていた。それは記念的に残すらしい。

大仏は、駅から北東に歩いて数分のところにあった。道路(木下街道)に面した墓地の入り口近くのところに座っていた。銅製の釈迦如来像で、高い台座の上に結跏趺坐けつがふざしておられる。頭部が大きいのがその像の特徴だろう。これは江戸期の1776年に作られた古いもので、近隣の住民に親しまれてきたという。明治時代の廃仏毀釈を乗り越え、太平洋戦争中の金属供出の要請にも住民たちが拒否して、守りぬいたとある。

手前の一对の筒には花が挿し入れられていたから、世話している人の存在がわかる。寺の本堂にも寄った

いところだったが、近くなかったので、これ帰ることにした。



鎌ヶ谷大仏
不審者が立っていた

国立歴史民俗博物館で、加耶の特別展が行われている（12月11日まで）というので、加耶と倭の関係について注目している私としては、見に行くべきだと思った。

②佐倉連隊兵営跡（千葉県佐倉市）2022/12/4
古代加耶の王陵などで発掘された考古学的資料の数々が韓国の博物館の協賛で展示されている内容の主なところは、NHKテレビ「日曜美術館」の番組で紹介されていた。そして、数年前韓国に行って博物館巡りをしたことのある私としては、それらを改めて日本で見る必要はなかったかもしれない。

日暮里から京成線で成田方面行きの快速電車に乗れば、京成佐倉駅に比較的楽に行ける（乗り換えなし）。それでも我が家からは遠いから早起きしなければならなかった。

その博物館には、私が若い頃、JR佐倉駅から歩いて一度訪れたことがある。そのころの記憶は薄れているものの、展示物に関してリアルでりっぱな造り物が多い、という印象が残っている。

ちなみに、それぞれ東西に走る京成佐倉駅とJR佐

倉駅の間は約2kmあり、その間に主要な佐倉の街並みがある。

そこに歴史的な家屋が残っているというので興味をもち、できるだけ歩いて、街中を見て回ろうという意欲があった。

京成佐倉駅から線路に沿うように歩いてゆき、佐倉城址公園の北側の入り口から入った。

ゆるい上り坂を行くと、途中の路傍に平地があり、その奥の方に石像が見えた。道路から距離があるものの、かなりの大きさがあるから、存在感がある。寄り道になるけれど、こういうものは近寄って見たい。

顔の表情がいい。ややあどけなさを見せてはいるものの、おだやかな顔だ。この尊顔には見覚えがあった。背後にある、大きくくりぬいた岩も相当に大きく、仏像に覆いかぶさる大波のようだ。仏像は丈六の大きさがある。この石仏も大仏の範疇に入りそうだ。

新しく造られたものだ。近くにあった説明版を読むと、これはやはり、臼杵の石仏のレプリカ（模造品）だった。実物大だろう。国東半島の臼杵の石仏群（摩崖仏）といえ、なかには国宝になっているものがある。私もその画像をどこかで見ていた。



臼杵石仏（レプリカ）
対面しているのは不審者

レプリカにしてはよくできている。優れた技量の人
が造ったものだろうと感心した。そして、造るのにい
くらかかったのだろうか、などとけちなことを考えて
しまう。

この周辺にはこれ以外の展示はなく、これ一体のみ
だ。これは博物館の所蔵品の一つだろうけれど、ここ



国立歴史民俗博物館の
入り口に続く坂道

に置いては、一部の来場者にしか目に留まらないから、もったいない。場所的に疑問を持ってしまふ。車やバスで来た人たちなどは、目もくれず、素通りだろう。そこから博物館の建屋が見えているが、入り口まで少々歩かなければならない。この博物館の建屋は近代であり、広く大きいから、回り込むように歩く。

受付で1000円（シニア割引はない）を払い、入ってゆくと、加耶展があるのは一番奥の地下にあるから、さらに歩かさける。

その展示内容では、主に、馬具、武具、装飾品などがきらびやかに置かれている。騎馬は戦力としての存在が大きかった。馬の頭部（顔の部分）を保護する鉄の防具もあつた。騎馬は戦闘の最前線で活躍したのだ。加耶は、朝鮮半島の南部で古代に栄えた小国の集まりだ。諸国を総称して加耶と言っている。漢字表記にはいくつかのバリエーションがある。加羅とも表記・発音される。

博物館では、代表的な加耶諸国として、

金官加耶、阿羅加耶、大加耶、小加耶

の4国の名を挙げていた。

いずれも、倭国との関係が深く、ひんばんに交易をおこなっていたことが示されていた。例えば、倭国で製造された物品が加耶の地域で発見されたりする。

私が余計な注釈をすると、加耶族は洛東河流域で文明を発達させた人々だ。（彼ら自身どこから来たかは、はっきりしないが、大陸の北方から来たものと考えられる）それぞれ独立性があり、小国に分かれながら

も、共存していた。人口が過密になったためか、人の移動を活発に行った。馬や船を利用して各地に移動した。その受け入れ先として、未開の地だった日本列島に目が向けられた。多くの加耶人が当時の最新型の構造船で、集団で（リーダーの下で組織的に）対馬海峡などを渡って日本列島に入った。彼らが大陸由来の稲作や鉄の文化を列島に持ち込み、弥生時代を切り開いた。

彼らの船はまた、日本海側の沿岸伝いに山陰地方や北陸地方への航路を確立し、出雲などの町や村を発展させた。さらには東北地方の沿岸地域にも進出した。そのためか、日本海沿岸では東側の地域より稲作が伝わるのが早かったという考古学的痕跡がある。

彼らの文化として、言葉についても列島に色濃く反映した。ヤマト言葉だ。ヤマト言葉は、言語研究家・パク・ヒョクソン朴炳植（1930～2009）によると、今の韓国南部の慶州地方での方言に多くの共通点が見いだされるといふ。韓国語と日本語は今では「似て非なるもの」とされているが、古代では同じ文化圏であり、共通的な言葉が使われていたと彼は解説する。弥生時代から後年まで、その交流において通訳など必要なかったとする。

なお、日本列島に入ったのは加耶族だけでなく、高

句麗・百済系の扶余族も多く入った。集団が入植すると、民族・氏族の対立や利権・覇権（支配権）を巡る争いがどうしても起きる。半島での争いが、列島にも持ち込まれ、各所で争いがあつたわけだ。エミシ・エビスとかクマソなどと称された「まつろわぬ者」（反政府勢力）たちは、迫害され、けつきよくヤマト王権に退治された。ただし、時には反逆に成功して覇権を握ったりした。壬申の乱がその一例だろう。

加耶諸国と日本列島の人々は、互いに人の往来や物の交易を頻繁に行い、協力関係にあつた。主従関係があつたというべきかもしれない。主は、もちろん宗主国たる加耶諸国だつた。加耶諸国の中でもリーダー格の国は、任那みまなと称された。任那には「宗主国」（盟主）の意味がある。

加耶人は、もともと、中国側から「倭人」と呼ばれていた。半島内の加耶の国々は、新羅や百済に切り崩されたりして勢力を弱めたが、日本列島の加耶人たちは逆に力を強めた。彼らは、本国を「倭」と言い、自分たちは「大倭」（大和）として区別するようになった。

その後、本国の加耶諸国の王権は周辺国の圧力によってつぎつぎに滅ぶと（562年新羅により併合され

た）、倭人は日本列島に住む人々に限定されるようになった。「大倭」を自認する彼ら自身は、倭と呼ばれることを快く思わず、国号の表記を日本に変えた。中国側としては、日本といえば、「いにしへの倭国だ」と理解した。

特別展から常設展まで一通り、盛りだくさんの物や映像を見て回った。常設展では、歴史的風景がジオラマ形式で実物大や縮小模型で多く展示されているから、その充実ぶりや、精巧さにあらためて感心させられる。戦争に関しても、武器や兵士の姿が生々しく再現されている。中でも銃のコレクションが目を引く。歩兵の装備など、昭和になっても明治時代のその延長であり、進歩が見られない。

その途中、博物館の由来を説明した表示があり、この一帯が佐倉藩の城があった場所であること、明治時代には旧陸軍の佐倉連隊の兵営地として使われていたことを知った。この地に明治7年、日本最初の軍隊、歩兵第二連隊が駐屯したとある。以降、彼らは各時代の多くの戦争・紛争に関わった。

太平洋戦争では、佐倉連隊はフィリピンに派遣され、多くの将兵がその地で戦病死したという。特にレイテ、

ルソンの島々は激戦地になった。

1944年10月からの、マッカーサー司令官率いるアメリカ軍による反攻作戦で徹底的に攻撃された。フィリピン住民にも敵視され、ゲリラ戦を挑まれた。日本軍は開戦時、アメリカ軍から住民を解放したつもりでいたのかもしれないが、住民に支援されないような軍隊はダメである。

レイテ島などに派遣された佐倉連隊の主力（約2500名）は転進（撤退を言い換えている）を重ね、壊滅した。救援もなく、補給が途絶え、食料・弾丸が尽きたとき、かれらは投降して捕虜になることは許されなかった。傷病により歩けなくなった者は自決するしかなかった。かろうじて生き残った少数の者たちだけがセブ島に逃れ、終戦を迎えたという。

私は、博物館を出たとき、この城跡公園内に佐倉連隊が兵営した痕跡があるかもしれないと期待した。

やはりいくつかあった。公園内を歩きだして最初に見つけたのは、兵舎のトイレ跡だった。木立に隠れるように、コンクリートの基礎部だけが残っていた。二列の個室部分に、いくつかの大きめの穴があいている。人々が用を足していた痕跡が確かにある。

これを見ると、つい私は、アウシュビッツ収容所の

「トイレ画像」を思い出してしまった。



佐倉連隊兵営のトイレ跡

これだけでなく、親切なことに案内板があり、佐倉連隊名残の構造物の場所がいくつか地図で示されていた。これは見て回るしかない。

地図で示されていても、佐倉城址公園は広いから、

それぞれ見て回るの容易ではなかった。ちなみに、佐倉城址公園には、実物大模型の天守閣や櫓やぐらなどはない。石垣なども見かけられなかった。城跡と思えるのは、土塁や、池のような堀があるだけだ。



十二段階段
訓練施設の一つ。二人連れが見ていた。

歩いてゆくと、十二段階段と名付けられた構造物が



佐倉連隊兵営の油脂倉庫

あった。これは兵隊を訓練するための施設の一つだったという。この上から飛び降りる訓練を行うものだ。高さが3メートルあるだろうか。足がすくむような兵隊がいたら、指導官がうしろから背中を押してやったりにして……。十三段にしていけないことが、一つの配慮だろう。



佐倉藩・武家屋敷の一軒
ここは有料施設。

次に、火薬庫跡に行ったが、破壊されたコンクリートのがれきがあるだけなので、割愛しよう。その近くに、油脂を保管するための小屋がほぼ原形をとどめていた。

それらを見て回って、私は十分満足した。



武家屋敷で見かけた防空壕らしきもの
竹のすだれがかけられていた

城址公園を後にして、次に佐倉市の観光名所の一つ、
武家屋敷へ歩いて行った。
そこでは、まっすぐな道路に沿って古い家屋がいく
つか建ち並んでいる。茅葺^{かやぶき}の屋根だから、古い農家の
ようにも見える。

その道路際に、盛り土されたような区画（道路を掘り下げたものだろう）があり、そののりに竹のすだれがかけられた部分が三か所並んでいた。

私は、ピンとくるものがあった、すだれの下部をめくり上げてみた。コンクリートで枠取りされた横穴の入り口が、ちらりと見えた。〈これは戦時中に作られた防空壕だろう〉と私はかつてに確信した。それならば、隠さないで、これも観光名物の一つにしてもよいかと思う。しかしながら、武家屋敷に防空壕では、やはりミスマッチか。

このあと、佐倉市立美術館へ向かった。途中、遅い昼食として老舗風のそば屋でそばを食べた。大きな石蔵に隣接した重厚な店構えだった。店内もアンティークな雰囲気があった。本格的に打ったそばらしいが、腹がすいているときは、何でもおいしい。

美術館の建屋は旧川崎銀行佐倉支店だったと聞いていたが、近代的すぎるビルに建て替えられていた。ファサード（正面部分）だけ、それらしい面影を残しているが、興ざめだった。中の展示内容を見て回って時間を使ったので、もう他に寄る余裕はなくなった。

③ 香取海軍航空基地跡（千葉県旭市／そうき匝瑳市）
2022/12/11

香取航空基地は、「香取」という名がつけられているが、香取市の地よりもっと九十九里浜寄りであって、千葉県旭市にあった。

この航空基地では、二本の滑走路が中央で交差し、X字型になっているのが特徴だ。今では、ここは工場団地（鎌数工場団地）になっているが、そのX字の地形が、区割となって地図上はつきりと残されている。実際に滑走路の一部も残されているという。ただし、民間工場の敷地内だから、基本的には一般人は中に入れない。

滑走路がX字型では、上空から見ると見えなくなるから、連合国側の攻撃機にとっていい目標になっただろうに、と私は思ってしまう。

周辺にはいくつかの掩体壕と、近くの公園に自衛隊の練習機だったものが置かれているというので、12月11日（日）私は行ってみた。それらはJR総武本線・千潟駅から徒歩で行ける場所にある。

そこはかなりローカルなところであり、電車を乗り

継いでいくのでは時間がかかる。私は、東京駅のバスターミナルから高速バスで行くことにした。銚子方面へ行くルートはバス停の一つに「千潟」を見つけ、ちよどよいと思った。

八重洲口のバスターミナルは近年拡張され、離れたビルの地下にあったことが私を戸惑わせたが、バスに乗ってしまうと、気分は悪くない。バスは順調に走り「千潟」に着いた。

バスを降りて辺りを見回したが、ここがどこなのか、私はさっぱりわからなかった。私は、てっきり「千潟駅」のそばだと思っていたが、それらしい風景ではなかった。しかたないから、たまたま車から降りていた配達の運転者をつかまえて、道を聞くと、千潟駅はここから6〜7 km先だという。

「うえ！ なんということ？」

ずっと内陸側の道路わきにいた。この地のバス停に紛らわしい名前をつけたバス会社を恨みたい。でもしかたない、2時間ほどかかる覚悟で、私は歩き始めた。風が冷たいが、歩くのにちょうど良い天気だった。バス停の場所など、調べればわかることだった。調べなかった私が悪い。

わたしが持っていた地図では、圏外だから、どこを

歩いているのかさっぱりわからない。方角は確かだと思っただけだ。

しばらくして、病院らしい入口の前に停まっていた軽自動車の運転席に高齢者が座っていたので、道を聞いた。要領を得ないところもあり、話が少々長引くと、彼は干潟駅の近くを通るから、その車で送ってくれるという。まもなく彼の妻が車に戻り、3人で干潟駅に向かった。たいへんありがたいことで、感謝感激の道行だった。私が掩体壕を見に来たというと、親切にも、その近くで私を降ろしてくれた。

そこは、鎌数伊勢大神宮の裏手にある掩体壕だった。私が事前に知っていた一つだった。掩体壕は多く作られたのだが、旭市ではたった一つ残されたものだ。柵で囲われてはいないので、近づいて見られるが、隣の民家の所有物らしく、大きな倉庫として利用されているようだ。廃材と見えるものが中に置かれていた。



旭市内の掩体壕
中は物置として使用されていた。

そして、なかなかの格式がある鎌数伊勢大神宮に形だけお参りしてから、香取航空基地だったエリアの周りを歩いた。

やや古めかしい工場などが立ち並んでいるので、航空基地だった雰囲気を感じられた。

しばらくして「旭緑地公園」について。鎌数工業団地の一区画が公園として整備されたものだ。公園とい



練習機「T-6 テキサン」
旭緑地公園で

うより、慰霊のための広場だろう。立派なピラミッド型の慰霊塔がある。この基地からも多くの特攻機が飛び立ったという。

広場の奥に航空機が展示されている。これは旭市が海上自衛隊から借り受けているものだという。

黄色に塗装された機体（看板には機種としてS M J形と表示されていたが、一般にT-6 テキサンと呼ばれる）で、自衛隊で飛行訓練に使われていたという。胴や翼に日の丸が印されている。もともとは戦後、アメリカから供与されたものだ。機体がゼロ戦の形に似ているから、展示されているのだろう。（実写版の映画で、よくこれが日本軍機に似せて飛行する姿が撮影された）

でも「英霊」のそばに敵機を置くのはどうなのか、と思う人もいるかもしれない。英霊たちは終戦を知らずに死んでいったから、敵軍用機がそばにあったら、心穏やかでないかもしれない。

あるいは、浮かばれない霊たちがこれを見て、こうつぶやくかもしれない。「ジブンたちも、こんな機体で十分に飛行訓練を受けられたらよかったなあ。ジブンたちの場合、爆弾を抱えて敵艦に突っ込む模擬訓練だけだったもんなあ」

さらに北方へ歩いてゆく。滑走路だった北西端の先は、区画された田んぼが広がっていた。そこは匝瑳市春海地区であり、今は晩秋で、茶色い、乾いた地肌を見せていた。



そうさ
匝瑳市春海地区の掩体壕
二つが原形を保っている。ただし
草木に覆われている。

見通しがいいから、遠くにあっても、二つの掩体壕がすぐに見えた。これも香取海軍航空基地に属した、残りの掩体壕だ。香取海軍航空基地があったことを示す物的証拠だ。

関係者の間では「田んぼの中の二つの掩体壕」として知られている。おそらく農作業する人にとっては邪

魔な存在だろうが、絵になる。農道を歩いていたら、ちようど、本格的なカメラを持った二人連れに出くわし、同好の士として言葉を交わした。

これらを見て、私の掩体壕を探す旅も一区切りついた。地元の店で、やたらと脂っこいラーメンを食べたあと、JR干潟駅からのんびり帰った。

④馬堀海岸周辺の遺跡（神奈川県横須賀市）

2022/12/24

12月24日(日)少々早起きして横須賀市の馬堀海岸周辺を歩いた。晴れていたが風が冷たい。

ここは走水地区はしりみずというべきかもしれない。観音崎へ行く手前にある。京急・馬堀海岸駅で降りてから、東へ歩いた。ここから二か所を巡った。

最初の目的地は「馬堀自然教育園」だった。ここは横須賀市自然博物館の付属施設として管理され、遊歩道以外ほとんど手つかずの状態に残されている。ここを含め、周辺には、かつて陸軍砲学校があったが、その火薬庫などの遺構が現存するという。

この教育園の隣が馬堀小・中学校であり、道端に、その陸軍重砲兵学校の跡地に建てたものだという表示



池の近くの横穴
長方形の入り口、奥行き約4m
軍用に掘られたものだろう

板があった。戦後一時期、その兵舎は、陸軍の復員手続きや援護所として使われたとある。
私は校内をのぞきながら（全面的に建て替えられたようで、それらしい遺構は何も見つけられなかった）、その周囲の道をしばらく行くと、馬堀自然教育園の入り口に辿りついた。



火薬庫と背後のコンクリート壁
強固なコンクリート壁で隣の広場
と隔てている

管理棟があり、裏庭にはザリガニが釣れるという池がある。（今の季節ではさすがに無理だろう） その先は小高い丘になる。
その下の斜面に、横穴が口を開いていることに、私は興味を持った。これは軍用に掘られたものだろうが、防空壕でもなく、何かを貯蔵するためだったようだ。

遊歩道を上がってゆくと、火薬庫・弾丸庫跡が2棟あった。重砲兵学校で実弾を扱うため、一時的な貯蔵施設として建てられたものだろう。一見バンガロー風の小屋だが、それなりにしつかりした造りで、原形を保っている。

その一つの横に重厚なコンクリート壁がそびえている。この火薬庫の隣の広場で、砲術の実技が行われていたのだろう、と私は想像する。その影響を避けるため、厚い壁が造られた、と私はみる。

遊歩道を一周すると、その他、井戸の源泉（横穴式の井戸）や、崩壊した神社が見られる。遊歩道には急な登り階段があったりして、不審者には、けっこうしんどかった。

次に、走水砲台跡に向かった。横須賀名物の古いトンネルを通り、走水海岸に出た。ちなみに、この山側の広い地域には、防衛大学校がある。

海岸に平行する公園のベンチで小休止して、海を見ながら、家から持参したナツミカンを食べた。東京湾を行き来する船舶（大型客船も含む）や、対岸の千葉県がよく見えた。ぼうっとしていると、トンビに襲われてしまった。左手に持ったナツミカンのひと房が取

られそうになった。江の島での経験があった（パンを盗られた）から、驚かなかったが、トンビがナツミカンをとるとは考えもしなかった。目のいいトンビも、見間違えたようだ。見上げると、上空には複数のトンビが飛び回っていた。人が食べるものを狙っている。退散するしかなかった。

さて（よこすか海岸通り）を歩いて間もなく、籬山崎公園について。この辺には東京湾に向かって、小さなでっばりのような地形の岩場があり、破埼、御所ヶ埼、籬山崎という岬が並んでいる。

この公園の丘陵部分に、明治期に要塞化された砲台の跡が残っている。「走水低砲台跡」という。この公園には立派すぎるトイレがあり、駐車するのに好適な平地があるのだが、なぜか車を締め出しているから、あまり人が立ち寄らない（寄れない）。多くの人々は観音崎に向かい、ここを素通りしてしまう。

海側の小高い丘に登っていくと間もなく、木立に隠れていた砲台跡が見えた。半円形のコンクリート砲台4基と、それらに接続する付属施設がある。明治期にレンガで造られたもので、要塞のようだ。地下に弾薬庫があり、弾薬を滑車で引き揚げて、砲身に装てんす

る仕掛けだ。それぞれの弾薬庫の入り口には鉄の扉が付けれられているが、いくつかは開けられ、中に入れる。見学者にとっては、うれしい配慮だ。中は暗いが、ライトがなくても、かろうじて見て回れる。何もない空間だった。



走水低砲台跡の一つ
中心部に加濃砲を据え付けた
仮設の階段に登った不審者の影が映っている



弾薬庫の入り口
不審者が中に入っていった

それぞれの砲台は、これまで私が見てきた他の砲台と比べて小さいと感じられた。ここには27cm加農砲が据え置かれた、と看板にある。砲身をほとんど水平にして敵艦船の側面を狙い撃とうとしたものだ。

さらに、周回通路の脇の地面には、直径1・2メートルほどのコンクリート基盤がいくつもある。これらは、おそらく昭和期に据えられた対空砲火の跡だろう。



対空砲火の台座跡？
左下に不審者の左足先が写っている

看板によると、走水の近辺には、ほかに5、6カ所の砲台跡があるという。ほとんどは非公開になっているというから、そこらに行ってみる気は起こらなかった。この砲台跡を見ただけで、十分満足し、帰路に着いた。

ここからはバスの便もあるので、バスに乗り、馬堀海岸駅にもどった。途中、防衛大学の近くのバス停

から、紺の制服を着た初々しい二人が乗り込んできた。彼らはその学生に違いない。彼らは規律正しくふるまっていた。時々言葉を交わしていたが、言葉遣いが丁寧で、まじめそうな話をしていた。りりしさにやや欠けるが……。

駅に着くと、私は、その近くにあるソバ屋でナメコそばを食べた。気風のよさそうな店主こだわりの一品だった。まずはなかつたけれど、冷たい。この季節、私は暖かいそばを食べたかった。それはメニューになかった。